

## フィヨルドの旅(東南アラスカ)

1968年8月 井上 達男

1968年、神戸大学カナダ・ユーコン学術登山隊がアラスカに着いてから、およそ三ヶ月半を登山と旅で過ごし、日本へ帰るパルプ運搬船に乗船するまで、僕はとうとうアラスカ・ステートフェリーの全航路をたどる事になった。アラスカは東南部よりゴールドラッシュが押し寄せ、開拓されていった。そしてこの細長いフィヨルドと多数の島の複雑に入り乱れた地域に、南からケチカン、ラングル、ピーターズバーグ、シトカ、ジュノー、ヘインズ、スキヤグウェイの七つの町が発達した。これらの町は、ヘインズ、スキヤグウェイを除くと島にあるか、氷河の山に背後を閉ざされているかでフィヨルドが重要な交通路となっている。

スプルス(シトカトクヒ)の原始林に包まれた大小様々な島の間を縫って行きかう三艘のフェリーは、アラスカに相応しく氷河の名が付けられている。タク(Taku)、マラスピナ(Maraspina)、マタヌスカ(Matanuska)である。

### ラングルからヘインズ

6月8日、日本から太平洋を越えて山清丸は、ロバート・ケネディの死を悼む半旗の掲げられたラングルに上陸した。初めて訪れた異国の土をしっかりと踏む感覚は何とも言えぬ良さがある。十日余の足元の定まらぬ船上生活から解放され、いよいよこの足で歩き始めるのだと。

さらに二日を船内で過ごし、簡単な入国手続きを済ました後、10日夜、船と共に続いていた日本の生活に別れを告げて、アラスカ貧乏旅行が始まった。

アラスカパルプの斎藤さん宅でフェリー待ちの時間を過ごす。ラングルは、トーテムポールが多い小さな島で、製材工場があるだけで、初めて訪れた外国の町としては、ちょっと小さすぎて実感がわかなかった。海外旅行の盛んな近年だが、こんな小さな片田舎に入国する人は滅多にいないだろう。

棧橋で二十人ほどの乗客に混ざって乗船を待つ。全く経験した事のないこれからを思うと胸が躍ってしかたがなかった。ようやく薄暗くなった空の下、左手ウォロンコフスキー島の陰から静かに水を切って、近代的な流線形の船が滑るように港に入って来た。

中園さん、坂四さん、僕の三人は、斎藤さん夫妻に見送られて、フェリーへ乗り込んだ。乗客の多くはアメリカ本土からの観光客で、楽しそうな雰囲気だ。若い娘が彼の胸の中で別れを惜しんでいる等、少し



ヘインズ(Hains)に入港するフェリーボート

湿っぽい情景が見られるのは、やはり船旅の持つ一種独特のムードだ。二人の姿が夕闇の中でシルエットになって浮いているのは詩的に見えた。

さて、眼鏡の一人とカメラの一人、合せて **three boys** は、完全自動操舵、最高速度 24ノットの最新式フェリーボートの横腹に開いた大きな口の中に入って行った。薄暗い車庫倉から階段を上ると豪華な船内が目に入る。銅のプレートに T A K U と船名が印されている。豪華なシートの船室に驚かされて、ここは一等席ではないかとしばらく落着かない。一旦荷物をそこに置いて船内探訪に行く。船の最前部のスペースは、展望室になっている。総・ガラス張りで、ちょっとしたサロンと言える。トランプをしたり、雑談したりしながら次々に展開される光景を見る事ができる。最後部は、食堂とバーで、静かなルームだ。中央が座席と個室になっている。一等、二等の区別はないわけだ。日本の船もこうならないかと思う。結局展望室で時を過ごすことにする。

今はそろそろ黄昏てきたアラスカの空の下に、密生したスプリューズの林がわずか 2、300m の狭い水路の両側に黒いシルエットとなってどこまでも続いていた。水面はあくまでも穏やかで、これが海とは信じがたいものだった。ここ東南アラスカの地図を見ると解る事であるが、フィヨルドと言っても、ノルウェーあたりにあるフィヨルドとは少し地形が違う。幅広い氷河とそれに枝を分かつ氷河がかなり深くまで陥没した後に海水が流れこんだため、深いU字谷の底に水面がある様相が典型的なフィヨルドと思う。東南アラスカの場合は、かなり内陸へ食い込んだ地域でないとそれは見られない。大小無数の島を網の目状にフィヨルドが入り乱れている所が多い。この二つの地形的な違いは、受ける印象の違いとなって現れる。太平洋に近いほど島は低く森林は島の頂まで完全に覆いつくしている。スプリューズは密生し多湿のため苔が繁茂し、熊が多数棲息しているのも何となくうなずける様に、原始的な臭いを醸し出している。フィヨルドを奥深く入っていくと、兩岸は急峻になり、その上に青白い氷が見え始める。さらに奥は急崖の中腹から上を万年雪に覆われ、その中から鋭い岩峰が天に向かって突き立っている。それは、スイスのどこか湖の畔から見上げるアルプスの山々の景観と似ているかもしれない。しかし、この狭い水路の兩岸にはてしなく続く様は、壮大で美しく、東南アラスカならではものだと思う。

翌朝船はジュノーを出てヘインズへ向う。この間、リン海狭は丁度上に述べた風景が展開する。初めて氷河を見たせいもあるが、僕は歓喜に胸を騒がせ、精神は極度に緊張し続けた。自然の造形は僕の想像していたものよりずっと力強く、壮大でしかも変化に富むものだった。「静かなフィヨルドの奥で、森と氷河と鋭い岩峰が対話している」。こんなロマンチックな夢を抱いてやって来た自分を十二分に満足させてくれた。再び黄昏の中、アラスカ本土へ向かう玄関、ヘインズへ着いた。キャンプ場に我家を作り、北の空に太陽が沈むのをテントの中から見たのは午後十時を過ぎていた。

## ホワイトパスからスキヤグクエイ

一ヶ月間の登山活動で、スティール峰、ウォルシュ峰に登頂し、再び緑豊かなクラーネ湖へ帰ってきたのは、7月27日だった。全員真黒に日焼けして、ネイティブアメリカンと思われてもしかたのない面構えになっていた。それでもシャワーを浴びて髭を剃れば何とか日本人らしくなった。

全員で、フェアバンクスから、マッキンレー国立公園に行き、魚釣りにスケッチ等、楽しい数日を過ごす。増田さん、中村さん僕の三人は、飛行機チャーター費を支払うためと、日本での準備期間中何かと助言をいただいた、アルフォード氏に会うために、ホワイトホースへ廻って、そこからゴールドラッシュで

有名なホワイトパスを通り、スキヤグウェイからフェリーで、ヘインズへ帰る事になった。

ホワイトホースのメインストリートを北へ行くと、ユーコン河の岸边、ホワイトパス・ユーコン鉄道の駅に出る。丸太造りの駅舎は、ゴールドラッシュ当時を回想させる。現在、この鉄道は、観光客とわずかの物資を運ぶだけの役目しか持たぬが、1880年、J・ジュノーとR・ハリスによって、ジュノーに金鉱が発見されて以来、カナダ内陸にゴールドラッシュが進み、1900年にこの鉄道が着工された時には、「気長に待てば、そのうち乗れるさ。」などと混雑を皮肉られながらも、重要な交通機関になって、多数の人々が利用した。しかし、ユーコン州の銀が日本の資本で開発されようとしている今、再び産業の重要な役割をはたす事になるだろう。

8月13日、列車は朝7時半にホワイトホースを出発した。スキヤグウェイまで約180km、標高1500mのホワイトパス（白い峠）を越して行く。アルフォード氏宅で知り合った登山家三人と一緒に列車に乗り込む。彼等はアラスカ半島の火山地帯の氷河と湖の旅を終え、アルフォード氏に会いに来てきたのだ。これから、ゴールドラッシュの古い踏跡をたどって、スキヤグウェイへ出る予定だと言う。ベネット湖まで同行する。沿線は、ベネット湖までは、内陸性の乾燥地帯が続き、平原に背の低い針葉樹林が続く。ベネット湖から登りにかかると、氷蝕地形が展開し、まるで氷河地形の見本の中に入った様に、様々な地形を見る事が出来た。一世紀前のオンボロ客車のデッキに立って、美しいカールや山頂のアイスキャップなど延々と続くのを全く退屈する事なく見続けた。

ホワイトパスを越すと、垂直に切立った狭いU字谷にひっかかる様にして、列車が下って行くと狭い海が見え出す。対岸には、大きな滝が数段に分れて懸っているのが見えた。だんだん木が多く大きくなって、U字谷の底へ着いた所がスキヤグウェイの町だった。

一世紀ほど前、金の精錬所まで持ったこの町は人口二万人もあり、活気に満ちていたのだが、今はわずか三百人ほどがこれといった産業もなく住みついている。町はほとんどが空家で、町外れに行くと、全くゴーストタウンと化している。

フェリー出港にはまだ時間があったので、アンカレッジからやって来た青年と、金鉱跡の道をデュウエイ湖へ登って行った。急なU字谷の道をジグザグに登ると、スキヤグウェイの町並を真下に見る事が出来た。デュウエイ湖は小さな池みたいだったが、水に岩山を写して美しい湖だった。金鉱はここからさらに5kmほど登った所にあるという事で行くことをあきらめて、急坂を下る。フェリーが二つ汽笛を鳴らして入って来た。

船はまた Taku だった。僕は経験者、船内くまなく二人を案内する。カフェテリアに収まり、セルフサービスのコーヒーを飲みながら、増田さんと碁を打つ。ヘインズまでは、4時間、碁に熱中しているうちに着いてしまった。

## ヘインズを後に

7人が三つに別れて日本を出発し、集結したヘインズ。又、別れる日がやって来た。今度七人が顔を合わせるの、きっと神戸だろう。8月15日、坂本さんがバンクーバーへ向って飛び立った。翌16日、中西先生と僕もヘインズを去る。夕刻、残る4人に見送られ、キャンプ場を出た。松本さん宅でお茶をいただき、長く世話になったお礼を言い船着き場へ行った。フェリー、マラスピナは、17日朝早くアラスカ州の州都であるジュノーに着いた。

今日は日曜日、町は全く静かだ。店はすべて閉まっている。ホテルでホットドッグとコーヒーの朝食を取る。買物もできないので町をぶらぶらする。メンデンホール氷河にキャンプ場があることを知り、そこへ行って今夜の宿とする事にした、市内観光バスに乗り名所見物をしながらメンデンホール湖のそばのキャンプ場へやって来た。

メンデンホール氷河は、ジュノー氷原に源を発し、ジュノーの町はずれの海のすぐ傍まで流下している。スプリースの林に包まれた湖にまるで巨大な怪物の舌を出した様に先端を伸ばしている。年々氷河は後退し、その跡へ樹木が育成し、植生が変わっていく姿がはっきりと現れている。幅は3km ぐらいあり、氷の厚さは50m 近くある。先端の氷河湖に崩れた氷が多数浮かんでいる。太陽に照らされて、白く、又青く、時には緑に光っている。氷河が入口から見えるようにテントを張り、散歩に行く。中西先生はさっそく植物採集を始められた。それで僕もゆっくりあたりを観察する事ができた。

今日は僕の誕生日だ。この記念すべき日にモレーンの上を歩いたり、氷に手を触れたりできる事はこの上もなく楽しい。実際すべての物と時間を忘れて対峙した。小さな谷川を登る鮭の群を追う。道そばの水たまりで泳ぐ鮭の稚魚をずっと見つめた。それに飽きたら、苔のマットに腰を下ろして、手あたり次第にブルーベリーの実を口に押し込んだりする。そのうちに夢と現実の境がわからなくなってしまった。

テントを打つ心地良い冷たい風に目を覚したらもう十時だった。今日も良い天久だ。また市内バスで町へ帰る。かねてから欲しいと思っていた地図を買い、何冊かの本も買った。夜のフェリーには時間開かありすぎるので映画も見る事にした。

日本からアラスカへやって来た時、船はランゲルに着いた。そして今、日本へ帰る木材船ランゲル丸もランゲルに人港してくる事になっていた。ジュノーからフェリーでランゲルへ行く事になり、中西先生と二人、ウィッカーシャムという、アラスカ州フェリーよりさらにいっそう豪華なフェリーボートに乗った。スマートな外観と違い、船内はすべて木材を使い、船とは思えないほどだ。住居、それも良く整った家の様な感じだ。ルームはすべて絨毯張りになっていた。



ところが、この船は、パナマ国籍で、スウェーデン製というややこしい事情があるのを知らずに乗ってしまった。外国航路船として、東南アラスカに就航しているため、アラスカの二つの港の連絡には利用できないという規則があった。それを知らずに乗った我々が悪いのか、ジュノーからランゲル行きの切符を売ったフェリーの係員が悪いのかは別として、翌朝シトカを廻って夕方ランゲルで下船しようとした時、イミグレーションの係員に止められて初めて気づいた。先生はいろいろ

と抗議されたのだが、規則は規則であるから、従わねば一人につき250ドルの罰金を払えという。入国の時は、たいそう親切にしてくれた顔見知りの役員、小男だったので、ちょっと面くらった。又、アラスカパルプの岩田さんに相談する。ランゲル丸（我々の乗せてもらう事になっている日本船）は、今日入港して来るし、罰金を払うとしても、そんな金はどこを捜しても出てくるはずがない。払わずにすむ方法の一つ、カナダのこの船の終点、プリンスルパートへ行きカナダへ入国して再び出国すれば望みの港で下

船できると言う。幸いランゲル丸は、ランゲルで木材を積んだ後、ケチカンへ行く事になっていた。二人はウィッカーシャムでプリンスルパートへ行き、再びゲチカンまで帰って来る事に従う。そこで、この拾いものの旅を十分楽しむ事に腹を決めたわけだ。

これからの運賃はただになった。もめごとで顔見知りになったスウェーデン人のボーイさんに、一旦持ち出した荷物を部屋に運び込んでもらった。

かくして、トーテムポールの林立する港町ランゲルに上陸する事ができず、またフェリーの旅を続ける事になった。夜10時、日本船ランゲル丸が暗闇の中を明々とライトを照らして入港して来た。ウィッカーシャムは、それと入れ代りに港を出て行った。

ゲチカンも素通りしてどんどん南へ行き、北緯四十度付近のプリンスルパートへやってきた。8月20日、午前7時、税関で形ばかりの入国手続きをすませ、町の散歩に出かける。樹木や草花、それに空の色まであざやかに見え、風も暖かい。北国の生活に慣れていたので温暖な気候がなつかしかったのか、ベンチに腰かけて日光浴が楽しい。フェリーの着いた所は町はずれで、漁船がたくさん停泊している。漁業組合のビルが船にとり囲まれるように立っている。表通りを真直ぐに東へ行くと、ブリティッシュ・コロンビア州の連邦ビルがある。緑の芝に美しい花と噴水のある前庭に、カナダの国旗になっている大きな葉のカエデが植えてある。中西先生は、国際親善にこのカエデの種をもらって帰り神戸大学に植えてはどうかと考えられ、建物の中に入って行った。森林関係の事務官にこの事を申し入れると、グッドアイデアだと言って賛同したが、このカエデは東部のもので太平洋側にはないという。それを本を出して説明してくれた。東部から何とか手に入れて、日本へ送ってくれるよう申し入れ事務官と別れる。

町はいたる所花に包まれて美しい。歩道の端や、ちょっとした崖まで、いろいろな花を植えてある。それが、ダリヤ、コスモス、キンギョ草、ザルビヤ、オニユリと、日本式の季節感は全く用をなさず一時に開花しているようだ。

この三ヶ月近くずっとシュラフで寝て過ごしたので、ウィッカーシャムに帰ると特別室をあてがわれた。何にもまして嬉しい計いであった。一夜、ベッドでぐっすり眠ってケチカンに着いた。

## ランゲル丸乗船

ケチカンは雨が多い。霖が町を包むと雨が降り出す。すると又すぐに青空が見え美しい虹がかかる。ケチカンに着いたのは夜だった。ランゲル丸は我々のフェリーが着いた時、同時に港に着いた。着いたばかりであったので、本船に乗り込むのは翌日になった。港の隅にテントを張って、最後の放浪生活に入る。町の中なので少々気になって、木材やコンクリートのくずを捨ててある跡地にテントを張った。これが禍となり、その夜は強い雨に会った。冬用テントは雨を素通りさせ、シュラフから着ているセーターまですっかり濡れてしまった。

翌8月22日、強い雨の降る中、ランゲル丸のキャビンに入る。木材の積込み作業は続けられていた。なつかしい日本人の顔、顔、顔。

そして関西弁も聞えて来る。日本をそっくり積んで来た様な存在。今日からは、キャンプ場の心配も、食事の心配もする必要はない。残りの日々を楽しく過ごす事ができる。鮭の缶詰工拗を見学したり、中西先生の調査について行ったり、全く気楽な毎日を過ごした。

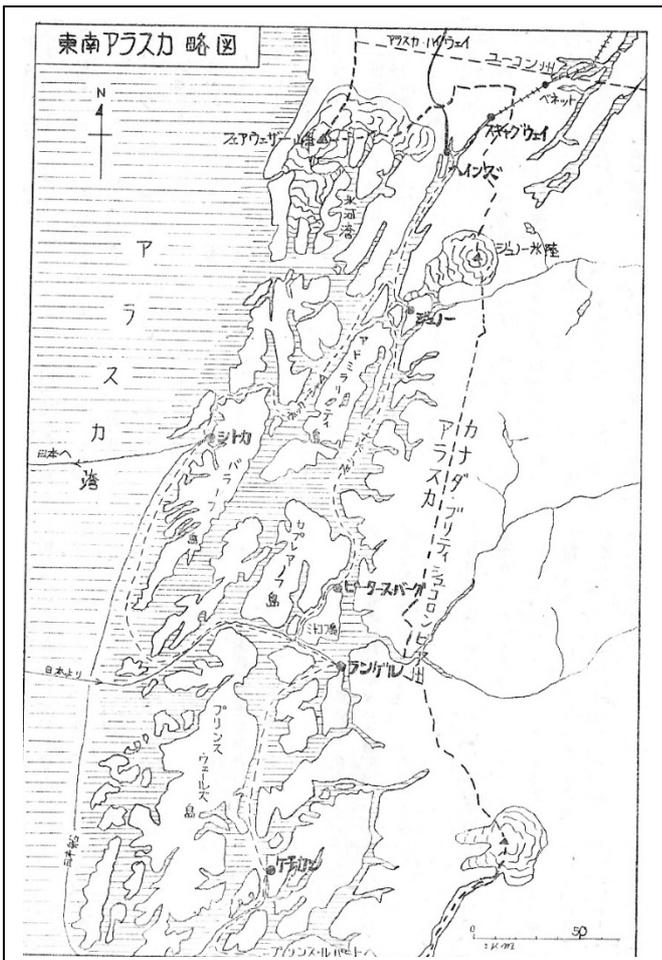
## シトカ

ケチカンで木材を積み込んだラングル丸はパルプを積むため、アラスカパルプの工場があるシトカへ行く。8月25日、小雨の中、多数の人々に見送られて出港した。三度、四度通った島々の間を抜けて最後の訪問地シトカに入港する。

シベリアの海岸地帯を探検したベーリングは1741年、東南アラスカの海岸近くを航海中、白く輝く巨大な山を発見した。そして、発見日、セント・エライアスデイにちなんで、セント・エライアス峰と命名した、これが、文明人によるアラスカ発見である。それまでインディアン、アリュート、エスキモー等の住む知られざる大陸であったのが、文明の火を見る事になった。

こうしてアラスカの歴史を探っていくと、このシトカを舞台にロシア人が活躍した時代に出くわす。現在町の発達している所から、シトカ・ハイウェイを10kmほど北に行くと小島の浮んだ入江に出る。小さな谷川が鬱蒼とした森から流れ出て来る所に、今は一枚の立札だけがある。このオールドシトカに、はるばるロシアから豊かな毛皮を求めてやって来た人があったことが記されている。

探検に次ぐ探検が重ねられた後、1784年、ロシア商人グレゴリー・シェリコフはコディアック島を基地に毛皮商を始めた。だ。しかし帝政ロシアはこれに満足する事なく、1799年、ロシア・アメリカ会社を設立、アレクサンダー・バラノフを長として、シトカに進出した、



しかし、この新しい地では、インディアンの強い抵抗を受けた。ロシア人達は彼等をコロスンと呼び幾度か交戦した。1802年、戦いに破れ一旦ロシアへ引き上げた。1804年、バラノフはロシア海軍を率いて、再びシトカへやってくる。インディアンを全滅させ、オールドシトカを築く。1819年に彼が没した後も、北太平洋のパリと言われるほどに発展していった。クリミア戦争で窮地に陥ったロシアは、1867年、アラスカを720万ドルでアメリカへ売ってしまう。不毛地、アラスカを買った事をアメリカの世論は、熊の楽園を作るのかと非難をあげた。

今、表通りに面した丘の上にはロシア時代の巨砲が海に面して砲口を向けている。歴史の新しい国アメリカのさらに新しい州、アラスカには古いものは少ない。それだけに人々は歴史の遺跡をたいせつにしている。

人口二千人、町は10分たらずで、端から端へ歩きぬけてしまう。海には小島が並び、水上飛行機、モーターボートが行きかう。鬱蒼と茂る森の中に美しい町並がある。

入江の奥にはパルプ工場がある。豊かな森林を利用してパルプ工業が発達する。ここでできたパルプ

を積み込み、船はアラスカを去った。

別行動からシトカで合流した坂本さんも乗船し、アラスカ最後の休日を楽しんで、8月28日、日本に向けてランゲル丸は静かに出港していった。

+++++

注記: 2022年5月17日

- ☆ 本稿は1969年発行の「山と人」10号(神戸大学ユーコン学術登山隊報告)に掲載された文を加筆修正したもの。
- ☆ 1968年当時はまだ外貨は審査が必要な時代で、一人500ドルが上限だった。登山隊は7人で3500ドルが現地での活動予算だった。